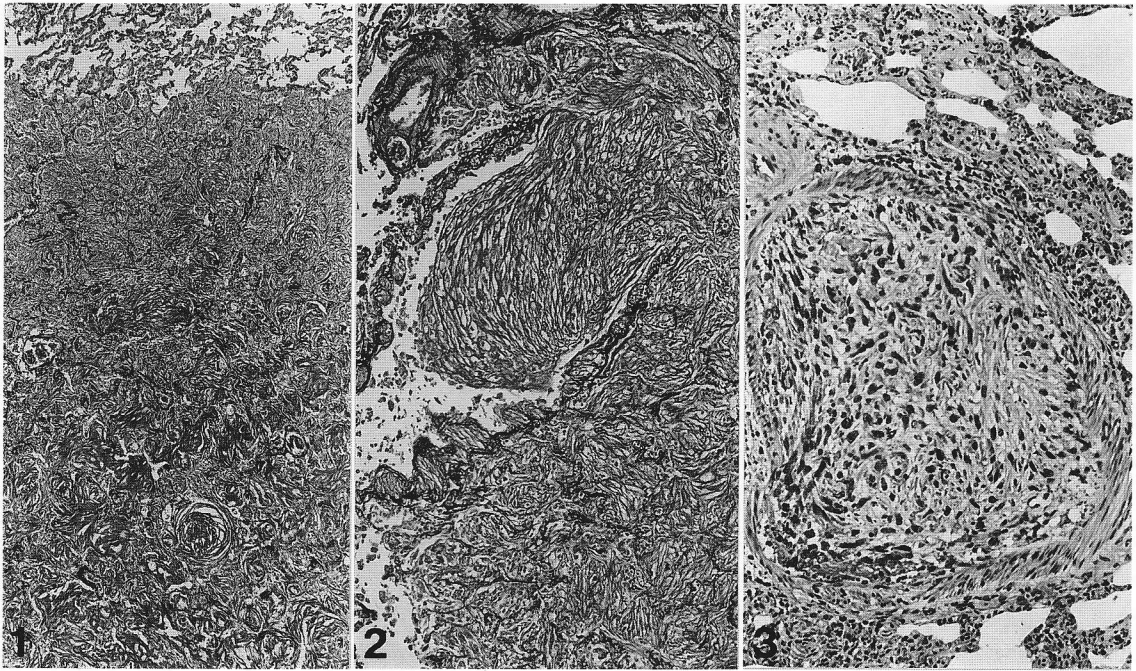


## 犬の肺

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題 第38回獣医病理学研修会標本 No. 712



動物：犬，雑種，雌，9歳。

臨床事項：発咳および食欲の低下を主訴に来院した。心電図検査で心室性期外収縮の頻発とST下降，聴診で肺水腫，X線検査で両肺葉に小結節性の陰影の散在，血液検査で肝機能障害が認められた。強心・利尿薬投与による治療が続けられたが，症状の改善がみられないまま4日後に死亡した。

剖検所見：肺実質内には径0.3~1.2cmの孤在性硬化領域が多発していた。これらの結節病変は灰白色で硬く，被包されてはいなかったが周囲組織とは明瞭に区別された。気管支および縦隔のリンパ節に異常は認められなかった。心臓には右心室の求心性肥大と右心房の拡張がみられ，肺動脈幹の動脈瘤性拡張を伴っていた。肝臓は軽度に腫大し，剖面は肉づく肝の像を呈していた。他の臓器・組織に著変は認められなかった。

組織所見：肺にみられた結節性病変は，硝子化した膠原線維からなるコアを，細胞成分に富む辺縁部領域が取り囲む形をとっており(写真1)，正常肺組織との境界部では腫瘍組織が隣接する肺腔内あるいは細気管支腔内に微小ポリープ状に伸展していた

(写真2)。加えて，結節性病変の内部とその周囲の血管内あるいは結節から離れた部位に存在する血管内への腫瘍組織の伸展も頻りに認められた(写真3)。腫瘍細胞のほとんどは好酸性の豊富な胞体と大型・類円形の核を持ち，時折，細胞質に赤血球を内包する空胞を有していた。免疫組織化学的検索では，腫瘍細胞の細胞質に内皮細胞のマーカーである第VIII因子関連抗原が検出された。

診断および考察：以上の病理組織形態ならびに免疫組織化学的検索結果から，本病変はこれまでにヒトでのみ報告されている“肺の類上皮血管内皮腫(Epithelioid haemangioendothelioma of the lung)”に相当するものと考えられた。研修会では活発な御意見・御討議をいただき，腫瘍を含めた様々な可能性について議論されたが，結論が得られないまま保留となった。その後，医学部・病理の先生にも加わっていただき検討をすすめた結果，肺の類上皮血管内皮腫との結論に至り(J. Comp. Path., 1998, 119: 317-322)，第39回研修会でその旨報告させていただいた。